

西帰浦から倭館、そして忘憂里の丘へ下

足立 龍枝

《むくげ通信235号より続く》

具常は敬虔な天主教（カトリック）信者だったので、先日亡くなった金寿煥機器とも親しく、一緒に写した写真が目に留まった。

とにかく交流の広さは半端じゃない。新聞社時代も長かったからだろう。

展示館のほかに木造の建物が保存されている。「觀水齋（カンスジエ）」という。



パンフレットには「具常詩人が、

「江」連作詩100編余りを発表するぐらいに洛東江は具常詩の原点だった。觀水齋は詩人が江を見つめながら絶え間なく心を洗い、ひきしめる「觀水洗心」の人生を送ったところである」と、説明されている。

また、李仲燮が居候していたこともあり、「李仲燮はここで絵を描いたのです」と説明があった。有名な作品が生まれたところだ。

この画家を愛して目守りし詩人あり
き元山ゆ南へ逃れたるなり

展示されている絵に具常の家族を紙に鉛筆と油絵の具で描かれた絵がある。具常の息子が、買ってもらった三輪車に乗り、具常が支え、その様子を具常夫人と娘が見ている。日本にいる妻や二人の息子を重ねながら描いたことだろうと胸が痛む。



日本にいる息子に三輪車を買ってあげると約束した手紙を何度も送っている。画面の前方右手のほうで羨ましさをこらえている自分の姿を描いている。バックにわずかだがうす

青色で洛東江の流れが描かれているのも印象的だ。

絵の中の具常の息子は亡くなっているが、娘は現在小説家として活躍中の具チャミョンさんである。

具常はハワイ大学に15年ぐらい勤務していたことがある。ハワイの海岸で娘と二人で写した写真がひときわ目立っていた。実際にほほえましい美男美女の父娘風景だ。

具常の写真はどれも人柄があふれていて、見ているこちらまで頬がゆるむ。

そんな具常のソウルの家に廣岡さんは訪ねたことがあると聞いた。やはり漢江（ハンガン）の見えるヨイドが住まいだったとのこと。

売られていたグッズのブックマーカーやキーホルダーには、具常の顔と李仲燮の絵が刻まれていた。

〈雨の忘憂里〉

ニつ國に生きたる悲哀 人は病み

己を滅ぼし今忘憂里に暮らる

1956年、41歳で亡くなった李仲燮の墓は、ソウル市の東端、中浪区忘憂里（マンウリ）の丘にある。

韓龍雲（ハン・ヨンウン）・方定換（パン・ジョンハン）など独立運動家や韓国人から尊敬された日本人淺川巧兄弟などの墓のあるところだ。広大な墓地公園になっている。

有名人17人の内12人は墓地内の一周道路に沿った位置にあり、標示もあって見つけやすいが、5人は別の道路から少し入り込んだところにある。李仲燮の墓もそんなところにある。

登山ブームの韓国。墓地公園を歩く人が絶えない。薬水の出るところが5、6か所もあるので、ポリタンクをショッピングカートに積んで引っ張っている人も見かける。

雨が降り始めていた。

管理事務所に行き墓の位置を聞くと複雑な場所のようだ。晴れいたら案内図に従って行くこともできただろうが。

30歳代後半の男性職員二人の内の一人、蔡さんが事務所に座っていた。雨降りに厄介なハルモニが来たもんだな、しかも一人で。インフルエンザの流行ってる国から、かなわんわんあという優しそうな恩案顔だった。

が、しばらく考えてから「ちょっと待ってください」という。そのちょっとがかなり長かった。

運転台の高い軽トラックに乗せてもらい雨の中を墓に向かう。標示もなさそうなところに停まり、そこから木の間を50メートルぐらい下る。道のないところを滑らないように遠回りをしながら歩いて行く。

蔡さんは事務所で会ったとき、私のことを、もうちょっとしっかりしていると思ったようで、はじめはさっさと下りて行った。途中で私がついて来ていないのに気づき、道を選んだり手を差し伸べたりして大変だったと思う。

準備に時間がかかったのは、事務所用の服から作業用に着替え、長靴を履き、雨具をつけていたからだ。完全装備だった。

「ソナム（松の木）のところ・・・」と、私を元気づけて案内してくれるが墓は見えない。歩きながら私の心中は、感謝、感謝でいっぱいだった。何が何でも行き着かなければと、用心しながら歩いて行った。

近くにあずま屋が見え、人の姿も見えたが、お墓参りではなさそうだ。

やっと、ソナムの陰に、墓碑（50×80センチぐらい）と祭祀用台の並んでいるのが見えた。

墓碑の土台には横書きで「大郷李仲燮画伯墓碑」。その上の黒い自然石を利用した墓石には絵が刻まれている。

草を刈り、手入れが行き届いている。ゆかりの人々が来ているのだろうか。



日本にいる家族が、墓の移転を希望していると、何かで読んだことがある。雨降りだったこともあるが、確かに行きにくいところだった。

ともあれ私は蔡さんのおかげで目標達成。

「テダニーカムサハムニダ」言葉では言い尽くせない。

雨はますます激しくなってきた。歩いている人の影もなくなってしまった。

〈最後に サムスン美術館〉

話には聞いていたが、サムソン（三星）美術館に初めて行く。李仲燮の絵があるからだ。

地下鉄6号線「梨泰院」の次「漢江鎮」下車、美術館は南山の南側ふもとにある。すぐ後ろが「ハイアットホテル」だった。

野外彫刻の巨大な蜘蛛の形をしたブロンズ像「ママン」は、世界的に注目されたと言う。

ミュージアムⅠは、古美術館になっていて、現代美術は、ミュージアムⅡに70点の作品があり、その中に、李仲燮の作品がある。

牛シリーズの「黄牛」と鶏シリーズの代表作「夫婦」が並んで展示してあった。

「黄牛」は、赤を背景に頭部だけのクローズアップ。日本による植民地支配の状況に抵抗する韓国民族を象徴するモチーフ。妻や子どもと別れ、あちこち転々としていた頃の鬱憤に満ちた自身を重ね、牛が首を振り上げた瞬間を描いた自画像だと言われている。

「夫婦」は、妻を懷かしむ悲しい心情を表している。

サムスン美術館で、やっと李仲燮の「牛」に出会うことができた。

地図は「韓国・近い昔の旅」神谷丹路著より

西帰浦・李仲燮美術館